古今栄雅抄

十四

意田

古今和歌集巻第十四

恋平

題しらず　　読人しらず

みちのくのあさかの沼のかつみかは見まほしきかな人の面影

みちのくのあさかの沼のかつみかはそこひしられぬ恋もするかな

あやめ草あらふ水の底ふかみ見えぬ恋をもいかでかはせん

ながれてはいもせ山とをへだてつつ人をぞ恋ふる年のへぬれば

あさかやま影さへ見えて山の井の浅き心をわがおもはなくに

ふかくさの野辺の若草つまもこもれるものを思へばいとど哀れ

ふかくさの野辺の若草かりにだにかれにしつまの面影ぞ立つ

めたりしぞかしかたをはなれ端午にわくたりしぞ後撰集に
ふるさとの郁芳門院の御方の招合に菊の原孝義の
ひやめ弟思ひくらをあゆくもきこえいそあさの沼に生る
はさ寺に蓮葉集に入られしうち如何但はさ寺合に八安達沼
にあやめたりといふ雜を後撰集に沼のあやめ
にやはり組合にてのちのちに日数ひさしくてそれに
うれてくれあしとそやうにそこにうれてくれさ
まにかつこにかをといふ事ハ月にあるに無く事にて
あるにやうある事にこそみちのくのおくにひとて
ばやうたりうたりうに寒き方中ねのれもふたりて下られ
あるにそ月あるふいくふあや絶をあるぬそと高に
ぬるさみしいとりをさそひるべきなるにあさられ

沼のかつこを刈とりてぬるおられあら言
はあるふうたをふくなるうと中古の人語伝へうう
六条右府の息女后宮亮信雅卿にみちのくれる
よなりて下くに京に出くやさられうにぬ事そうご
と也あやめ左衛門のおくおりうと後をうは中ねのはは
や出家もんそうたこふくく事やひごことなうん方ら
ぞこうん方をまざと物をあいたくいひたにやうあら
ふ宮八幡いうなうん所なうとにひしまよ安下に又所
なし鎌などうりて誠に塩竈浦こうまれうぐ欲
よりもあんりもぜんうこたくて面白くぬすもうそおが
ゆれとりさられまよあるうしぬん人のいそれうより
信をうれとそ後られ後うし潮こぐ小舟の綱ま

かなのもとをもあらもとりよ伊勢人し
のひとりにたゝ[illegible]きまもなくて人をゆへ[illegible]
うとあひしたくもおひしく[illegible]ぬ[illegible]
あまをとを後悔しこゝろぞきまて人とゆへてあるべき
物をとも

ふとしたる[illegible]中[illegible]
なりくしまんを八人をたゝきまをあまりきをぞ
ておもひのこゝろをいうのこゝろあるとはぐくる夏
ぞ月の山をたれとしはあまれの中乃なりくし
くあれぞさやの中山なりくまとゝ歌もあけれ
ぞれをさやも山もくしとゝ人をぞれをもゆまれ乃

藤原のあつゆき

春とゆへもたまれみをもまれ秋のあまもの[illegible]
きをたゝいとゝ見をせてよみをもあれ[illegible]
もゝあれのたゝつくしぞひよりゆまれとを[illegible]
ちるかもまをみまれたゝをもせよ見をもを
ぬ[illegible]

伊勢

[illegible]ふたゝゆとゝみえ[illegible]
あまれくゝ我面影のよとうゝ分なれ
人をゆまれとゝ八たゝをあくゝ分なれぞ[illegible]
ゆや

讀人不知

ふるゆきのみのしろたへにほふまで
いとまなくみのしろたへにほふまで
あらぬとぞみる

ひさかたのあまのかぐやまこのゆふべ
ふりまがふあさのゆきかな
せくやこのあすかあすかはやとも
あさなゆふなにかはかなしかるらむ
しらつゆは物なりけり一説物なりけり

友則

きりぎりすなくやしもよのさむしろに
ひとりかもねむ
いとどかなしきのはらのやまもみぢ
はなをはなれぬものとしらずや

忠岑

ふるとしのはるのはじめのとしのうち
はるたちけふのかぜやこぞとは
ちるはなのなごりをしみ
とはばこたへよ
かれてのちはとはばこたへよ

凡河内躬恒

はるたちけふのかぜやこぞとは
ちるはなのなごりをしみ
とはばこたへよ
ちるはなのなごりをしみ
とはばこたへよ

讀人不知

ちるはなのなごりをしみ
とはばこたへよ
ちるはなのなごりをしみ
とはばこたへよ

おとゝの川よりもちゝ流よりうの世なりとも我ゝひとりあたる
人をまたるふまゝにさと迄蓮河一ゝをびもとゝあり
も蓮河ゝ流ゝ多まゝ一廣ゝとゝ云又渕蓮河
流ゝとゝ云ゝ一多年をいつゝ世為河ハ
一ゝをびゝ一たび渕ゝ流ゝ流ゝとなゝ
いつゝ未世ゝたゝといつゝを百まゝ一年減ゝ多年に
十まゝ減ゝ為なり

寛平の法皇ゝ宇合の
ゝてふゝとゝをゝ為ゝゝゝゝ物ゝハゝゝゝ
ゝりゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
野ゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆきて誘ひふとられて失ぬるを、あん事あるべきかぎりぶ。濱色たる所にて、よみぢのくらきまぎれにづくしは田カ
よみぢのくらきまぎれ夜くらきまぎれ方を迷ひて、
海色ちきてこれらくる地さて事のやうをうかひて
明るをれば、ゆくよりぷとよ書ぷるをはのくぬの
ごとく行くしはすこと行るぷ方をうこひてくるう
くれぬぶ。ぶとぶ出ぬぶて、妻を恋るよりう
とねくおりひてはまふとうくるれぬ男も
恋も雪なぶれきゆるがおくに失ぬるう空郷
とあるよ。物語つくるまいさも事ちうある物とおと
しくはくうてぶ方をとまれもる事さうの事也
ぷちくやあれ空法のう姫乃物語て。ぶ物をまて

ちひあ物語とあ付あるぶ。ぶ乃ぶ紀のあるるか
物くうぶ。ぶ物語付ぶ。古今とぶ方をふぶ
ぶ。ぶ。ぶまうぶ幸也。ぶ用く
ぶやあんぶやゆんのいくひよ格の格戸もくに移名
くうんやくるへき。我やゆんとおりふやくらひよ門を
もくにねうくぶ地いくひあくらふに地ぶくよ
ひの月を十六夜乃月也いくふもやくらふにたう
物縁とぶ。ぶ物語とまていくくうひと行う空雪に
ぶいくうふやくらふ毎月乃何也遠久の此作者か
くあうしぶ。ぶ影よいくうぶ月とくたう人名
しをぶくぶ人とくでいくふ月ぶよあうくて
きをぶたうとやくうれぶ何を奥物乃行う

さらまさぞ人の袖ぬるやぬ雅よ習ひそうまる。百紫七。
山乃ちふいさそふ月をいさなんと待つ物ふ雲そ空よりそ
もれ〳〵雲やそうち河の網代木よいさよ浪乃行ゑ知をそ
うれはのうまれ山乃山さらよいさうふ雲ふ妹まろうまろん
山はもふ雲ていさそふ月待と人まいひて来やとうまて
山乃端よいさそふ月をそあとそて妹と乃てうへあく問れ
ちれをそでよ出をとつゆと乃ふとあり　あらん

うせいの法師

とまんとおひたちうよみ月のゆ月乃月を待おけるかな
やてあんとおひ人をゆ月はるてまつ程よ秋をしられ
ぬるゆ月さへ乃ふなうよりあるとも也。餘情あるこの也

漢人――と

後ろ〳〵とこそ人よ告やこんあてゆよ似うまこそ乃ふ
月面白ゆ雅をもづくふうあれと告やこぶ人とも
とつふよ似うち我もさてぐまこそ乃ふ
月雅ゆ八月雅なゆ月乃あくてよ紀也雅ふ
雨風なくもづくふよ紀なうでてゆ似うそ来とい
似うとこそ也。第五よ
京宮乃梅咲ゆりと告やこんあてゆよ似うち花ぬとこそ
ひ紙をゆとせり

春ちかくなれやつをいしこむ紀我りとゆひよ雪ハ亜ゆ
雅乃文ゆまで待てゆぐりとゆひよ雪をくとも。雪
ちぐさわやへをいくであんとゆぐ流うぬ
なうぐこむうさ紀をこあるゆ也。男乃りぐもろ

髪をぞ切りて乃ち元服せしめ給ひぬ。むらさきの
初めて元服せしも限りなき女の筆をとりそへ
男乃え服の様よ髪をとりあげて紙をさして額
を結ひ女乃そで結びて并をとりもむらさきの初
りもひとえべしを代給ふ。但内裏乃官女等を
時乃時皆髪をあげれたり。内親王などハをのづ
ゆれあるべし

高さにて切りたる髪を風と結ぶこと是をまして
六城殿乃木萩殿乃様もむまで有おをくをさそ風
を結ぶとく是を結ぶべきなりまれまでさう
あるべくおりまし也。りとあるべ乃木萩ハ。古殺ちる
るとくへ出るくに殺をるさくを木萩とこそ。りとあるべ木

萩をとあるべ乃様とるとも他まよりなり乃あるべ也
ゆるを人をみるくしるべ様乃山様乃ゆるをるるるべ
やるべ乃ゆるをかにさをまるやもとなるべこれ高さ
ぞをりんてかるとぞ我おりる人をよるへいるり様をる
如よるもるる高なれぞ也。大和様を唐様をとてあり
山里をるれぞ。ゆるるべそ遊ばるるべ。様の乃様を
まるれ乃様をさをぞ。ゆるるハ様乃也。あるくハ痛
やなり。山様をいやしき民なり。賤男賤女なり。婦
とぞ。ゆるべ様とるる

様の高乃なるをゆるるやまるるるるとるあひうん事をまるべ
ゆるるるよい人を思るべ。ゆるるひうん事をあるべ
さをる也。難波をる云。西乃

とりの雜部にとゝのへむべうもて書そ歌を
撰さ勢こゝろもとゝ
ゝ人ぬ方ちなれいろをも人ぬもとそ
ゝ人ぬ方ちなれいろをも人ぬもとそ
ゝ人ぬ方ちなれいろをも人ぬもとそ

さてゆたける松間乃河の川なることはなれるゆゑに我がゐやも
なることいそんとて苔なることも河流ともいつゝ吉野川
大河なれば大河乃べとゝ云ぽ河乃ほとりなり
かく云ふ物とゝ我もゐひまさんはうゝそはさゝうゝ
ゐやうよ云ぬ(まさ)りのとゝ(ゐ)ゐ(ひ)ひつるぽゝろ
乃うゝろまさゝくあひゐるとゝ也(ゐ)ゐよ心易(こゝろやす)あれば
大原ゐまこゝろゝ四神(しじん)ゐ(ゐ)ゐ(ゐ)ゐ(ゐ

ことをもてなしたるに
たる事乃ぬしの首の未だおふ代よりもとれむ我たまの
かさかたなる人辞きて我せこがんゐもこひあるをぬぬ
姫なる人は横辞乃ものもきをもてなしぬ月はへぬる
立川乃ものひきの糸をくりもてこしことをもくらもえむとなる
ものは欲をもてふてそてまりくるとなん
立川の糸をくりもてにしとくに人辞をもぐくありとも
ぶ弁給んとおりふたをもて命をまこうひしてえみい
まそで立川乃糸とこそ。立川の糸とこそ
男人のまゐ八立川をもくとももれゆく者よあいさうめやハ
人辞をたなのことくもぐまくまとくもぐれゆくまうんま
をあをでなるまじきをもて

若原飯行物語乃菓平物語乃事なりくるを
あひ一つとくふをはるはせりまをてことをふをまう
てくあをん乃ぬりくるをなんをつくこい給とを
つまをるをゆてくれをよりくりてよりくる

立原菓平の物語

おくふをひおをもにとをひくををを力をもる者をを塔れく
雨乃ふるにぬれてくををくをぶ者くおりふと知ふるを
見まづらひあにをぶにぬとをるべをぶ人のとひくを
なれをぶ力をを教面をるふりくををるを也者くを
とへぶひもおをもにもをを河乃おをりなり力を
をるふ面をぶ面をくをるぶ人をおりひをらぬををを
いふん也おれをををををれ世の人力をを教面をを

よりぬるとぞみゆれど。源をたづね人あるを
縁(えん)まもとめぬるくらゐ時雨の雨乃ふるふ袖て流るる也
万葉 袖こそ思ひ出人をまちといくらつゆも袖をまぬ
浅茅 ふ乃あはたこそ見ねすゑ乃ふとはぬ世乃くさとそ
あるふ女のちりひろ乃物をとゝろ空にあり
きたとおもひてよみてたてまつる

漬人——

たぬさ乃引もあまこふ感あれをぬへとえこそ軽まさられ
おもあぬさ乃ごとくぐ人れ引もあまこふんれうつまで
ぐへどくれまれぬと也だあぬさを幣乃事也ひくて
あまこと八おれ乃秋人の身まとりうに物なれば云
たりひろの物を

ひくもあまこ乃乃ふくあてどたあにふ人のすふちぐ
きとまるへきと也おれる六月(ろくがつ)稲なとふぬさをきり
きてこのよなりに事をとゝへありされだよん涙を
をとゝいておうてふ物をありといふ物を也

漬人——

すまれ塩乃塩やく煙風といこと空をぬすふ物をひきふろ
ふ屋のくりれ風よりとるびくこと空をぬくふ人
乃るひさぬふと也おうをふぬくよなるひく乃何優(やさ)
まこて鍾愛(しゅあい)ぬくやこ記ふ也伊物よハ男れん比よ
いひちろくる女乃ごとをとゝ海よりろれをとあり也
乃他人ふんにん也

むつかしきあまり示成ぬれとゆえぬいのうれ者也
ゆかつゝ乃ほまゝ乃まよひゝ乃ことゝおろかの人よ
りうへ也。絵ものとりるゝもうれしうたと也。玉葛ハ玉
物ハほむ歌ハ詞也。玉箒ハ猫なといふことゝ又女乃
くゝ乃ゝ玉鬘乃ゝ髭乃ゝ後撰ゝ。老懸ともむつゝとゝ云
伊物よハ女乃ゝ乃ゝひゝよをくゝ乃ゝ平とみえゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ雲よ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ時ゝ乃ゝたゝあゝふもねゝ乃ゝあゝすゝ
たゝすゝふ夜ゝれゝくゝ。人の容ねゝゝとゝおゝハゝゝゝゝと
部ゝにおゝせていゝゝ。ゝれゝ人の系ぬ者也
いて人ゝゝとゝれゝゝゝ乃ゝゝゝゝ

人の偽よるうはらくとも物りうとよまよあが誠
あれとくあれむへきふあうとも也

素性法師

秋風よ山乃本紫のうつ紅へをを人のあうもいてくらそ物りよ
あうう物よ本紫乃ううろひゆくを見て人のんもうう
うくくりしとも也

寛平乃御時きさい乃宮の哥合のうう

とも乃つ

恋れあうきを人のうう　秋うをくや人のなうむを思ハ
ちぐうう乃うをくや人のなうんとこへぐせうの唱し乃
をうをを也くおやゆうと也　夜をうをくを
いをんあなう

影うを

寄雨乃世れ人うれをうれをうれをまぬとうくれぬつうぬ
をうる紀世の人乃うれひさぐうれぐうるくんを
なうれども思うをとをうれむをうを也うくハ離宮也
うをうを乃世ををうる紀世也世をいをんあ乃ふり
なう人諱のをうれぐハ人の上いつる乃をぐれを也
世乃人ようくいをうれぐ思うをとをうる人をいつり
あをうをうをん中ハをうれをなあをを也ふ後の日ハれをふ
ハうをてをうん中ををうれをを乃ふをを也ハて恋
乃うをみよせんと也ををぐよハうれをぐをハなうあぬ
おを後乃かうをにをんと也ハれぐうんをうまて後乃
うををなう。ふ雅よあうを。彩古人うよ

菊むの乃ちとれるこの岩ほ乃ほとりの山風
あらのとうやうとうとれるうらうらと遊列なり
ちれるんと思ふんの乃はくうふあるうらうらまるまつて意引
勝字也
あぢさたくされと思ふんくーこふとたるまんと
ねりふんの乃あまそぎまへうらまうて意ーこと也
うたまたんあとうむかはるる人の枕よはあるんとも也
人のあうよはあるんとも也ぬをぬるとくれとうむ
るとう郭公をなひてふーこいうら
絶もゆくあるもれ河乃ーとこたんあるとや人のあるとん
山ふかはる人のいとくなるとこれあつま人うこ方也
あるもれ河乃あるんたなるれ絶くがよとむーこくーぶーと
みるぶーとんあるとや人のうこひうんと也

清乃ちとむと人をみるこあるとなるれてみるこさんあるこれと
ちとこ河のーこーぶーと人をうんるうめるも底みるこさんの
ふるとぶ人をふーこーと也流くをゆくをふ乃事也

万葉い注如

庵もかこ也
そこひるれ淵やはさらく山河乃乃渋を澄ふこそあるこ流れて
山河乃あるれ渋ふあぶ流のるつぶーく渋くはるふ市
にこうあるこんたくぶんぶーを測乃底のひれ
事ふくふるれぶーと也ぶこひ底乃ひる事るれ也

よみ人不知

くれるれ乃初もふ染のるこふくこひこうるれるれめや
紅のこつるれうれのーとくーぶーあくはりひんるれぶ
然ーるこまーこと也紅のこうるるこうむぶふ乃

これも物を初乃物ものを紀事也

河原左大臣

みちのくの乃安ふかもちもち雅也へよ郎そあうゝ我なゝちるゝみ
ちのくもちもちのごとく。誰那よみられんと切りふ我なゝ
ぬよ。ふかふこゝろんをみられと也。ゆれ那よんれみられん
とおりふ。ふかなゝぬゝらゝて。ゆれに我ん乃こゝろゝと
ゝんをとゝてゝりふ。ちれふ。ゝもちもちをみるゝ。といゝん
まゝう也。伊物よ八郎れゝあゝゝとゝみ。昔天智天皇
乃御時。奥州信夫郡ゝゝ。めぢゝとてぬいゝゝ
のゝゝゝなゝゝ文の郎まゝゝを貢ゝまる物なゝ。
一説みちのくの乃信夫郡よ天なれ石二つまゝその面
平ゝゝゝゝゝゝ文あゝ。藍ゝゝゝゝゝ

帝を郎貢ゝまゝを。物物蒙来にゝゝゝゝ也。逾昭ゝ乃
御簾の面ゝゝゝゝゝゝ

今うつしたたかはの方はあれ作をとりてなりひら
の業平朝臣の方とするもの事をとゝ代の人名おなじ
事なり

遍人不知

おもかげにいとゝ思せとゝろ秋風のまくひく波葉はなこと
とゝまるとて人をいとゝ思せとゝ牡風よりたゝびくあさち
のいろのあきやうなたちなくうとも也
ちはなふうはたらあとゝたゝふん秋の紅葉するゝ
人のこゝろの秋の紅葉をたゝふうつろめ
どゝとゝまんとゝもとゝ也

をとゝてまち

あらたまくようゝうんとゝ人のゝ

あまはとゝむ星のとゝまるべきゝぬようゝうんと人のゝ
ゝよいゝゝむとゝ也恨を海てゝとゝゝとゝまるべき俗也

とゝまつ夕のをむ

昨日の月の新たなれるゝ我なれやゝふゝとゝ月をとゝ見
ゝ月をとゝゝとゝ月の新のごとく人のゝとゝみゝとゝ
ゝ月をとゝはるれどゝとゝひてあれとゝ也人とゝ新とゝ
物をとゝゝとゝ日とゝ也ゝ月とゝ也ゝ人とゝ新とゝ
天眼(げん)をこれをゝんとゝ

無ゝ

ゝゝを見ゝ人ゝ我ゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
ゝゝもなき我ゝゝゝを人ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よみ人しらず

ちはやぶる神のいがきもこえぬべし我が下紐のとけまくもしも

歌一きひとふあらんとてやちをぬ下紐のとくることを也

ぢもせぬ人をこそ思へ人よりもまづ恋ひまくを我は

下紐乃とくることいつよりか恋ひそめしかと思ひ定めず

とくべひものとくることいつよりか恋をせぬ也

かなめろつのそねらあしぬ人をそねみぬ人をそねみぬ

うれしてあらはるぬ人をそねみぬ人をそねみぬ

かがぬろつかるれらあしぬといふんまうちぬまれ

ふるねとるれぞと四人にうへ恋れぞ袖のぬることを也

ありぬぬろつかといふもれをありとをくるもの心也

ちぬくぬふみえぬをれをそれらあしぬといい

ちんとくかがぬふとも天の原ふり放け見つつ

とをもぬぬくまろつかを情緒とをぬぬなる事にあり

とぐろ乃あくちいさ紀也ぬのくをふにくてかまろ

をゆるともあり。情緒をぬなり

堀江あく梶のとをる潜くろ乃ぬ一人ぬや恋ぬるなん

ちりぬぬぐちいさ紀ぬのいぬくあびもゆきくりをる

をとをへておちぐ人よ恋ぬるを也難波堀江也

天皇乃行幸時ちりぬぬ江也ぬぐと海ちりぬほりの也

ちり。堀江乃川とをもあり。梶なを小舟ぬちいさ紀ぬ也

ぬちぬぬぬ梶あまをなり

伊勢

ちぬとあれすとをとをとをよまちぬ袖のあいこうちなん

海のごとくあれる庶をたちい神や渡らん
ぐさとたちぬ海を行く船なれど元つ国とは宮
あらそふよりむがたちひたちう

貫之

つ[illegible]てまれ[illegible]ちつ[illegible]れ[illegible]
人の[illegible]さごとふ物ならぬ世せで[illegible]
事なれぬ[illegible]
人を思ひあひつてなひひとくてこれを[illegible]
あらをとさらなりさ[illegible]
よみくつらをまれ

大伴くろぬし

[illegible]く[illegible]と人[illegible]

[illegible]く[illegible]
[illegible]
[illegible]

とうとて西にしの祭拾ひとうとて西の祭拾ひとうとて
今はとくとうとうとうとうとて我やうあるこ
なれどもたづねもまこがくうふんとも修養の
かよいつれ給なり

[illegible]

[illegible]この名ハつまるまうん人をとうとも我とうとうん
人はとうとうゆくうとうとも門あづくうまりまどひてよ
うせうて我とうとうんとも修りふうとうあううう為か
一されあまりまなうう万ふうあかうつうひのうう
をうをとうとうゆくうとも修とうとうあうう為ふうう八出
てはううあうあうとうとうとうと

中納言源乃の朝臣のあつまりたまひし後
ゆるされてやれらるる
源羅の朝臣延喜八年中納言九年民部卿十四年
大納言

閑院

あつまりの中納言ふかくこそ思ひなりたまへれ
お坂の本縁付給なりしかどきみが接ぎをなくもあめ
うるべきふかき家なりもきれば人なる事のなりにけり

伊勢

古今よみ人しらず我やあふ人のこころはあれにけりあらん
山ぶきとまたはなしぬよさらぬる人の人乃伝としてあるとて
をとこあれにけりと也おれにけりと人の伝あるなり

寵

山ぶきのかさねにさくまつらんとしもとつくめは
ぬるとよりとを吹くあれ風ぐあふをなつかしきをとめ人きく
きどもこそ傳をさへあとなりへさうらうこあさらに
あれつらをへへいくれどもとうをんとてたりとをき
つぐらは序なり

さうぬ乃ひとさと 源人言

おかの宮をこそ人のうこ見人の八物なりおとふなるめらるん
もれおもふとふそこれたるあらるへいちひさ人の
うこまきくあれとも也

後人

逢まて乃ちみも我八行をんまんてもんのなくさ安くみ

あつまりて乃うたをあそぶ
なくさむべき事なりと祝也。記念ともせし
あさうたち
扨や乃まりうたうたの人のむとあふいとしのひて
あひさくをあらいひろあひしまおや乃ふとい
ひろれをいうさうとてをとたんぬさをさて
へよろろうれちをもとうへをとそくよあろ
おきう粉
きまて乃うたうたとてこうとあ事あ源ようふをくつ成て
あふまでのかうをあひて祈をくらんなれど源ようふ
をくづ乃ごとくだうこぶてまぬしはうとも
野しうを
徒人しうを

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちぐさなる物とこそはあんなれとあるは男ハなほ
ひらがなにてかくべきものとハおもはれもせ
まどもぞなりひらの琴の爪をまいらせ物ゝ物ゝ
注をり